

中古

まずは海外の研究状況から。緑川真知子「カノンの受容と古註―海外の古典研究の今―」（『武蔵野文学』55 11月）は、ハルオ・シラネ等の海外の研究者によつて導入された「カノン」という言葉が包摂している意味ないし現象」の分析から始まり、それを軸に海外の研究を分析・紹介している。「カノン」は、「古典」という古めかしい用語に対し、もつぱら受容の側面に視点を置いて作品を把握する言葉のように思える。「古典」の受容史・享受史の研究はすでに着実に成果を重ねているのだが、それに社会的・文化的な視点を導入したところに、「カノン」という用語の新しきがあるといえようか。ともあれ、「翻訳が研究の中心であった世代から、古注釈を自在に操る世代へ」、言い換えれば享受史に着目する世代へと、海外の日本研究が進化しつつあるのは、まぎれもない事実である。絵巻や絵本など、古典作品の絵画化が注目されるのもその一端だが、そのような海外の傾向は、いまや国内の研

究にも大きな影響を与えている。

そのような中で、『伊勢物語絵巻絵本大成 資料篇・研究篇』（羽衣国際大学日本文化研究所編・角川学芸出版 9月）が刊行された。同種の集成としては、これまで伊藤敏子『伊勢物語絵』（昭和59年）が唯一のものだったが、今回の『大成』は収録作品も多く、図版はオールカラーで原本の雰囲気を伝え、「資料編」の解題も詳細である。古典文学の絵画化の研究は、これまで「源氏物語」に集中して論じられてきたきらいがあるが、この刊行を機会に『伊勢物語』の絵をめぐる議論が活性化することを望みたい。ちなみに『伊勢物語古注釈大成』（笠間書院）の刊行は二巻で停滞しているが、まもなく続行の予定。上述のような状況の中で、別冊索引も含めた全巻の刊行が待たれる。

緑川も紹介しているが、8月にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で、『伊勢物語』をめぐる国際ワークショップが開催された。国際学会についても、

『伊勢物語』がテーマとなったのは、おそらく今回が初めてである。主催者でもあるジョシユア・モストウの発表「女性読者と平安時代初期の物語」は、ジェンダーや読者論の視点から絵巻を捉えて興味深かったが、他にも享受史をテーマとした発表が多かった。当日の発表を中心に、詳細はそちらに譲りたい。

土方洋一「秘事伝承とその成長」（『日本文学』5月）は、「高階師尚が在原業平と伊勢の斎宮との密通によつて出生した子であるという伝承」が、『白河院政期に新たに作為され、文献に記録されることを通して流布し』たと主張する。土方は倉本一宏「一条天皇」（吉川弘文館平成15年）の記述をふまえ、早い時期にこの伝承に言及した文献として知られる『権記』の当該記事が、諸本の原本とされる伏見宮旧蔵本で行間に追記されていることについて、「風聞が流布するようになった」院政期より「後のある時点で」「加筆されたもの」と考える。土方の論が伏見宮本の原本（マイクロフィルムは国文学研究資料館で閲覧可能）を見ることがなく行われているのは残念だが、この問題は、『伊勢物語』の受容史、特に虚実の把握の歴史を考える上で重要であり、また、テキストとしての公家日記

の性格を考へる上でも見過ごせない。「権記」ないしは公家日記の専門家からの発言を待ちたい。

岸本理恵「定家監督書写の和泉式部集」(『国語国文』7月)は、片桐洋一・田中登などによる冷泉家時雨亭文庫の調査によつて明らかになつてきたいわゆる「定家書写本」についての新しい知見をふまえ、「現在『和泉式部正集』・『和泉式部続集』として扱われる『和泉式部集』の祖本」が「定家の側近により書写されたものであり、一揃の『和泉式部集』として定家の手元にあつた」ことを明らかにした労作。この成果をふまえたさらなる展開に期待したい。川端春枝「水の田芹歌をめぐる―更級日記注釈のいくつかの問題―」(同12月)は、日記中の和歌の解釈について通説を批判したうえで、作者の再出仕時期が通説より三年早いことを、根拠をあげて明らかにする。そのことが和歌の解釈につながり、ひいては作者の結婚生活への思いの問題にもつながつてゆく。『更級日記』を考へるうえで、今後見過ごすことのできな重要な論と言えよう。

「源氏物語千年紀」を迎え、伊井春樹「各界の動向 イベント」(本誌巻末)に紹介されているように、さまざまな行事が繰り広げられている。京都では「紫の

ゆかりちゃん号」と名付けられた電車も走るなど、その盛り上がりには、実は通俗的な「カノン」でもあり続けてきた「源氏物語」の底力を見る思いもするが、せっかくのこの機会を古典文学再評価のために大いに役立てたいものである。論集「源氏物語へ 源氏物語から」(笠間書院9月)は一月号の時評で紹介済みだが、あえて二編を取り上げたい。編者でもある永井和子「問はず語り」の場としての「源氏物語」は、「問はず語り」という用語の意味を追いながら、それが「礼節をわきまえずに怪しげな話をしながら、実は語らずにはいられない真実を語る、という逆説的な物語の仕組みそのものへの関心を導く言葉」であると結論づける。津本信博「源氏物語の日記文学的方法」は、急逝した著者の推敲未了の遺稿だが、登場人物の反省や述懐の記述に注目して、「源氏物語」を「創作的日記文学」として捉える。両編とも主題的には特に目新しい論ではないかもしれないが、着実な読みを通して物語の深みに入り込んでゆく過程に迫力がある。物語そのものの「怪しさ」やそこに記される「反省や述懐」、「源氏物語」の醍醐味ともいえるそれらの深みが、「紫のゆかりちゃん号」ではすべて振り捨てられていくことを、ひとまず確認しておくことに

しよう。この他、中井賢一の一連の論考「光源氏と絵合」(『王朝文学研究誌』18号5月)、「夕霧へ太政大臣予言」の論理(『国語国文』6月)、「夜ごとに十五日づつ」通う夕霧(『古代中世文学論考』二十輯)新典社10月)には新しい読みを切り拓こうとする力強さを、中西紀子「葵巻末・正月左大臣邸訪問」(『王朝文学研究誌』同)には鋭敏な問題意識と着実な方法の確かさを感じた。

石井公成「草木成仏説の背景としての和歌」(『叡山学院彙報』32号19年1月)は講演記録だが、日本仏教特有の思想である「草木成仏説」の成立を、平安和歌を含む「国風文化」形成の一端として捉えて説得力に富む。「秋夜長物語」から始まり、歌人遍昭とその弟子であった安然の關係に注目する論の展開は興味深い。思想から文学へという方向だけでなく、その逆の關係も含めた視点は、今後の平安文学研究にとつて有益である。海外の日本文学研究は、緑川が紹介するように、作品の翻訳から、その作品を生み出した文化の分析へと軸足を移している。国内の作品研究が文化の論にまで広がり深まっていかなければ、平安文学研究の真の国際化は実現しない。石井の論に学ぶべきものは多いといえよう。